



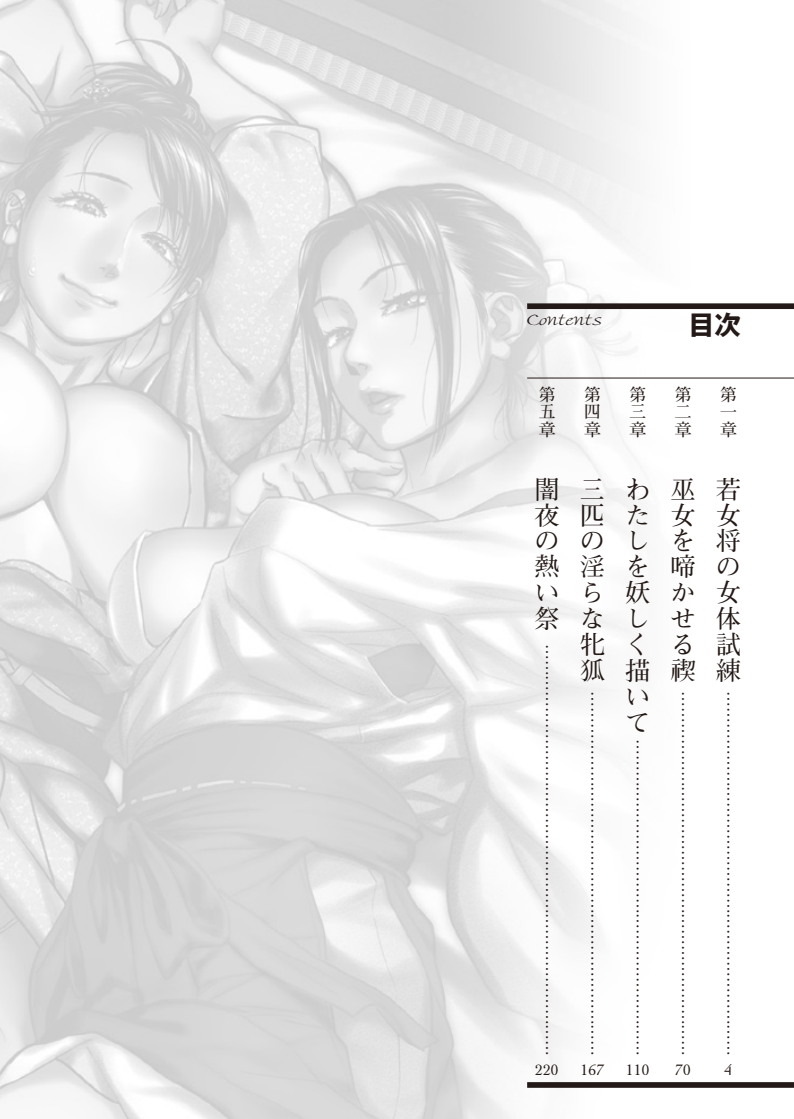
濡れる温泉郷

年上美女の誘惑祭りにようこそ

羽沢向一

挿絵 / 木静謙二

立ち読み版



Contents

目次

第一章	若女将の女体試練	4
第二章	巫女を啼かせる禊	70
第三章	わたしを妖しく描いて	110
第四章	三匹の淫らな牝狐	167
第五章	闇夜の熱い祭	220

大垣 弘志

(おおがき ひろし)

高校生。小説『紅の祭』を愛しており、作品の執筆された聖地巡りをするために、紅宵荘で住み込みのアルバイトを始める。

蘇芳 雫

(すおう しずく)

弘志の血のつながらない伯母で、代々旅館を経営している蘇芳家の嫁。若くして夫を亡くすも、若女将として温泉旅館『紅宵荘』を切り盛りしている。33歳。

桂 美月

(かつら みつき)

雲居神社の宮司の娘で、先祖代々の伝統を受け継ぐ巫女。28歳。長い黒髪と巫女装束の似合う、清楚で凛とした女性。

柊 寿々香

(ひいらぎ すずか)

土産物屋『柊屋』の看板娘で、赤岳温泉の文化財保護活動を行なっている。26歳。健康的に肌の焼けた、あけっぴろげな性格の女性。

新城 尚子

(しんじょう なおこ)

紅宵荘に宿泊する美大生。22歳。奥手なお嬢様。弘志と同じく『紅の祭』に惹かれて温泉郷を訪れ、彼とともに作品のモデルとなった聖地巡りを始める。



雫がうめく音色に合わせて、子犬のように豊熟尻と美巨乳が痙攣する。尻たぶの奥では、肛門がすぼまっては開く動きをくりかえす。

弘志は自分の足もとに横たわる淫靡で、同時にかわいさを感じる裸身を見つめて、確かめずにはいられない。

「イッた！ 雫さん、本当にお尻の穴で、イッたんですか!？」

雫は弛緩した肢体を床にだらしなく寝そべらせたまま、うつとりと目を閉じて、荒い吐息混じりに答えた。

「……ああ、そうよ……わたしはイッたわ、うんん……弘志ちゃんにイカされてしまったのよ……弘志ちゃんは、試練をクリアしたわ……はああ、だから、わたしの身体で射精してもいい、きゃっ!」

雫の腰を弘志の両手がかみ、強引に引き上げられた。再び両膝をつき、尻を弘志へ向けて掲げる姿勢にされる。悦楽の汗で輝く尻肉に、甥の声がぶつけられた。

「雫さん、ぼくのを入れます!」

返事を待たずに、右手でつかんで狙いを定めた勃起ペニスを、前へ突撃させる。

弘志の頭の中は、雫に挿入して童貞を捨てる欲望が充満していた。

ただし脳内を占領しているのは、女性器ではない。今まで舐めしやぶり、指でえぐ

ったお尻の穴。自分が絶頂を与えた肛門に、痛いほど疼く肉棒を押し入れたくてたまらない。

赤熱した亀頭が肛門に触れる。一度果ててゆるんだ尻の穴は、積極的に男の欲望の塊を受け入れる。皺のすぼまりが広がり、人差し指よりも太くふくれあがった亀頭が難なく進入した。

尻全体がブルッと震え、雫の頭が激しくのけぞる。

「あひいっ！」

大きく開いた唇から、涎の糸とともに悩乱した声が洩れる。

「イ、イッたばかりなのに、弘志ちゃんのおちんちんをお尻に入れられたら、おかしくなってしまうわ！」

雫の変化に、弘志は気づいた。

（声が違ってる！）

口と指で肛門を責められているときには、雫の声音にどこかわざとらしい色があった。わざと弘志を煽る言葉を口にして、若い甥っ子を誘導しているようだった。

だが、今の雫の声は逆に弘志にすぎる音色に彩られている。

弘志は腰を強く動かし、一気に男根のつけ根まで、肛門の中に押し入れる。下腹部

が尻肉にぶつかり、雫の四つん這いの身体が前にずれる。

「いいっ！ あああん、いいわ、弘志ちゃん」

「ぼくも気持ちいいです。雫さんのお尻の中は、熱くて、やわらかくて、でもぎゅうぎゅうで、ぼくのが溶けてしまいそうだ」

「はああ、わたしもよ。弘志ちゃんのおちんちんの熱で、お尻がとろとろにされてしまおうわ、はおううう！」

弘志は腰を引いた。肛門の縁がめくれ上がり、中から雫の体液でねっとり濡れた肉幹が姿を現す。

腸を引きずり出されるような強烈な刺激に、雫は悩ましく尻をくねらせて応じる。

「ああっ、たまらないわ！ 押されても、引かれても、気持ちいいっ！」

雫が酔い痴れる歓喜を伝えるように、肛門と腸壁が蠢き、亀頭と肉幹を強く握りしめてはゆるむ。尻内の蠕動が、弘志から快楽を搾り出す。

舌と指で叔母を果てさせたことが前戯となつて、弘志は挿入前から絶頂に近づいていた。雫の尻から直接与えられる鮮烈な愛撫は、たちまち初体験の少年の限界を突破させる。

「うおおああっ！ 出します！ くううっ、ぼくのはじめての射精、受けてください

い！」

「あああ、ちようだい！」

雫が首を強くひねって、弘志へ淫熱のこもった瞳を向ける。飢餓にも似た肉欲の視線が、弘志の裸身に巻きつく。

「弘志ちゃんの精液を、はううつ、雫にいっぱい飲ませて！」

若女将の熱い視線と甘ったるい言葉が、弘志をガクガクと身悶えさせる。

「おおおうつ、出るうつ!!」

ウエストに十本の指を食い入らせて、全身を雫の尻にたたきつける。桃色に染まった女尻の最奥に、龟头を潜らせる。

そこで爆発した。精巣が決壊して、大量の精液がほとばしる。生まれてはじめて、女の体内で放った射精は、想像をはるかに超える快感だ。

雫は頭をのけぞらせ、四つん這いの裸身を硬直させる。肉棒を深々と突き入れられた豊臀だけが、彼女の意思を離れてピクピクと痙攣した。

「イ、イクうつ……………」

指でエクスタシーを迎えたときとは打って変わって、ただひと言だけ絶頂を訴える。開いた口の中で舌がうねるが、声は出せない。かすれた吐息が洩れるだけだ。

雫のその姿だけで、一度目の絶頂よりも何倍も快感が大きい、と弘志は理解した。弘志は肛門からペニスを引き抜こうとする。だが硬直した尻の括約筋は、しっかりと肉幹を噛みしめて離そうとしない。

どうしていいのかわからず、弘志はとっさに右手の指先で尻の谷間をなぞる。

「うんっ！」

雫は眠る猫が身じろぎするように、強く肛門を絞め、直後に尻の穴をゆるめた。

ようやくペニスを引き抜くと、雫の身体が支えを失って、再び床に腹這いで寝そべった。弘志が顔を覗きこむと、満ち足りた笑みが浮かんでいる。

幸福に輝く美貌を、弘志はもつと見ていたとも思ったが、やまない肉棒の疼きが訴える。

大量の精液を放出しても、ペニスは自分でも驚くほどの硬度と大きさを誇っている。もつと快楽が欲しい、とわめきつづけている。

「雫さん、胸を見せてください」

訓練された犬が飼い主に命令されたように、雫の身体がすばやく起き上がり、堅い床に正座した。

「はい、弘志ちゃん」

犬という印象が、ますます強くなる。弘志の前に座るのは、試練と称して年下の男を翻弄する経験豊富な熟女ではなく、男に従順な愛らしい年上の美女だ。

雫は両手を背中にまわして、ビキニのホックを外した。

ブラジャーから解放された乳房が、自由を謳歌するようにあふれかえり、サイズがひとまわりアップしたように見える。

尻の絶頂の余波を受けて、乳房はパンパンに張りつめていた。色白の乳球の先端には、淡い桜色の乳輪があり、中心から乳首が屹立している。

すでにしこり勃っている肉筒は、乳房の豊かさにふさわしい高さ太さを誇り、男に触れられるのを待つように揺れる。

弘志は巨乳の迫力と淫靡さに、単純な感嘆の言葉しか出ない。

「すごい！」

言葉と同時に、思考よりも早く身体が動いていた。右手で、雫の左乳房を握る。

「あんんっ！」

雫が声を上げ、握力に押された乳肉が前へ搾り出された。変形した乳球がさらに前へせり出し、先端の乳首がいつそう高くなる。

弘志は左手で自身の肉幹をつかみ、疼く亀頭を左乳首に押しつける。

男の勃起の先端と女の勃起の先端が、互いにこすり合い、二人の間に悦楽の火花を生む。

「おおう、気持ちいい！」

「あひっ、たまらない！」

雫は犬らしく舌で唇を舐めまわして、甥っ子に懇願する。

「弘志ちゃん、はああ、お願い、右の乳首にもおちんちんをちようだい！」

雫は自分の右手で右乳房を強く握り、乳肉を搾り出す。

「はい、雫さん」

押し出されたピンクの肉筒を、弘志は亀頭で上下左右に押し曲げる。雫がまた甘い声を出した。

「ひうっん！」

倒された勃起乳首が、弾力を発揮してすぐに立ち上がり、また別の方向に曲げられる動きをくりかえす。

「はああ、いいっ！ 弘志ちゃんのおちんちん、すてき、あああんっ！」

「もう一度、雫さんに入れさせてください！ 今度は、お尻じゃなくて、前に入れたいですっ！」

雫の美貌がとろんと蕩ける。官能の熱に浮かされた瞳が、弘志の熱意に満ちた顔と、今も自分の乳首を嬲る亀頭を交互に見つめる。

「わたしも！」

むっちりとした腰が物欲しげにくねり、肉体に雄弁に語らせた。それだけでは足りないとはかりに、言葉でも懇願する。

「わたしも、弘志ちゃんのおちんちんが欲しくてたまらないわ！ 今すぐ、わたしを貫いて」

弘志はこれまで何度も使った『はい』という返事を使わなかった。

「よし。雫さんのを見せて」

語尾に『ください』ともつけない。

「いいわ。弘志ちゃん。わたしのいやらしいところを見てね」

雫は正座を解き、尻を直接床につけた。伸ばした両脚を大きく割り広げて、膝を立てる。

弘志もエロいグラビアで何度も目にしたM字開脚が、実体となって眼前に出現した。息を呑んで、雫の前に膝をつく。

甥の前で、まだ叔母の恥丘は閉じたまま。真の秘密はあきらかにされない。

雫の右手が腹の上を滑り、広げた太腿の中心へ進んだ。

雫が自分の手で、閉じた秘密の扉を開こうとしている、と弘志は理解した。そして、先に両手の指を、雫の股間に当てた。指先に触れる恥丘のやわらかさに、ぞくりとした震えが神経を走る。

女肉の扉を開く。途端に、ダムが崩壊したように大量の愛液が流出して、床を塗らす湯に混じる。

「これが」

と、だけしか言葉が出ない。

目の前に現れたのは、熟した果実であり、同時に絢爛な花。ぷりぷりとした肉壁が重なり合い、風にそよぐようにひくついている。

クリトリスは大きくふくらみ、自ら包皮を脱いで、敏感そうなピンクの艶姿を見せつける。

肉の花卉の中心には小さな穴が開いて、内側の濡れた壁の一端を、弘志に覗かせた。年上の叔母は、頭をなでられるのを待つ子犬のように期待に満ちた顔で、甥にたずねる。

「わたしのソコは、どうかしら？ 弘志ちゃんにはどう見えているの？」

「きれいです。きれいで、すごくいやらしくて、ああ、きれいです」

「うれしい、ひゃうっ！」

弘志は最も目につき、関心を引かれたものに、口をつけた。肉孔ではなく、ふくれあがった肉芽を、唇で挟み、舌先で味わうように舐める。

ぬるぬるした甘い味覚が、舌先を痺れさせた。同時に生々しい芳香で、鼻孔がいっぱいになる。味覚も、嗅覚も、はじめて体験する女そのもので満たされ、脳が沸騰中のところに、雫の悲鳴が入ってきた。

「そ、それっ！ 弱いのおっ！」

ソコが女の最も鋭敏な部分だと知っていたが、雫の反応は弘志の予想以上だった。叔母のリアクションをもっと引き出したくて、夢中になってクリトリスを吸い上げ、執拗に舌で責めたてる。

弘志の頭を、雫の両手が強くつかんだ。自分を齧る男の子の頭を支えにして、若女将は全身を陸に放り出された川魚のようにのたうたせる。

「あうううっん！ おおおっ！ だ、ダメよ！ 弘志ちゃん、入れられる前に、ダメになるわっ！ はうっ!!」

雫は背中をのけぞらせ、Mの文字を描いていた両脚をまっすぐに伸ばした。足先で

十本の指が反りかえる。

小さな言葉が、星空へと昇った。

「イク……」

弘志は驚いて顔を上げた。口のまわりには、雫があふれさせた透明な体液がべつとりとついているが、気にならない。目の前の、雫の蕩けた美貌に集中している。

「もう、雫さん、イッたんですか!？」

「ああ、だ、だつて、お尻で一度イッてるから、しかたないわ。はあつ、わたしは一度イクと、とても感じやすくなつて、またすぐに昇りつめてしまう身体になつてしまふのよ……」

「雫さんは、すつごくいやらしい身体なんですね。あつ」

(しまった!)

失言した、と思う。かなり酷いことを口にしてしまった。

しかし、雫はにっこりと笑みを返してくれた。

「そうよ。すてきな旦那様が、わたしの身体を、いやらしくしてくれたの」

(それつて、亡くなった叔父さんに調教されたつてことじゃないか!)

弘志は、雫の亡夫の記憶はない。紅宵荘に来る前に母から、幼い自分と蘇芳夫婦が

いっしょに写っている写真を見せてもらった。やさしく知的な雰囲気だが、いかにも身体の弱そうな容貌だ。正直なところ、今の豊満で妖艶な雫にはつり合わないと思っていた。

（あの叔父さんが、雫さんをエッチに調教したっていうのか！）

頭にカッと血が昇った。自分でも理由がわからないまま、身体が飛び出す。激昂の中で、気がつくのとペニスを根もとまで、膣の中に押しこんでいた。

熱い。熱くてねっとりした肉で、びっちり唾えられ、猛烈に締めつけてくる。

「うわっ！ 雫さん、気持ちいいっ！」

弘志が知る言葉では、肛門に挿入したときとの違いを、上手く表現できない。似ているが異なる感触と圧力で、亀頭の先端から肉幹の根もとまでしごかれて、天に昇るような気持ちいを、気持ちいいとしか言えなかった。

突然のことに驚くのは、弘志だけではない。甥っ子の猛々しい勢いは、経験豊富な雫の予想も超えている。たまらず悲鳴を上げさせられた。

「はっううっ！ そんなに、いきなりなんて！」

若い獐猛さに満ちた肉棒に満たされて、女肉が熱い歓喜の悦楽を生みだす。雫の驚愕の声は、すぐに艶めかしい快楽を訴える音色に変化する。

「あつはあああ、弘志ちゃん、いいわ。激しくて、いいっ！」

叫ぶ雫の汗に濡れた左右の乳房を、弘志の両手の指がきつく握りしめた。二つの勃起乳首が手のひらに押し倒され、さらに熱い快感の炎を噴き上げる。

弘志は両手で握りしめた巨乳を支えにして、無我夢中で腰を動かす。若い欲望と意識しない嫉妬のエネルギを燃料にして、男根を突き上げつづける。

はじめて女性器に入った弘志に、セックスのテクニクなどありはしない。ただ激情に駆られて、単調な動きをがむしゃらにくりかえすだけだ。

その熱情と熱量が、若女将の身も心も感動させる。死んだ夫を思い起こさせる。女体をあつかうテクニクは雲泥の差だが、自分の肉体を淫らと言われてもしかたのないものに作りかえた夫の情熱と同じだ。

「あつ、あああ、弘志ちゃん、また、イッてしまっそうだわ！」

弘志に答える余裕はなかった。膣圧がより強くなり、より大きな快感を味わうばかりだ。一度、尻に放出していなければ、弘志もいっしょに絶頂を迎えたに違いない。

「イクッ！ 弘志ちゃんの激しいおちんちんで、雫、またイクうっ!!」

エクスタシーを迎えて痙攣する膣肉の中で、亀頭を暴れさせる。まだ絶頂の最中にいる雫の肉体が、間髪を容れずに新たな快感に襲われた。



弘志は意図を告げずに、谷間に顔を埋めた。フェラチオとスパンキングのおかげで、じつとりと汗に濡れている。湿った匂いが立ち昇り、鼻腔を甘く刺激した。

舌を伸ばし、汗を舐め取る。

「うんん……」

美月は声を上げて、尻を震わせた。白いブラジャーに包まれた乳房も、前後に揺れる。

舌が谷間を下へ向かって這い進み、問題の場所に到達した。肛門のすばまりの中心を、舌先で突く！

「ひいっ！ そこはっ！」

火を押しつけられたように前へ逃げようとする美月の太腿を、弘志の両腕ががっちりとかんだ。美術部員の弘志より、元体操部員で今もアスレチックジムに通う美月のほうが、身体を鍛えている。それでも男の腕力にはかなわない。

「逃げないで、覚悟してください。今日は美月さんのお尻の処女をいただきます！」

「そ、そんなところ、わたしは経験がありません！」

「だから、処女をもらうって言うてるじゃないですか」

手足を顔を背後へ曲げて、手足をばたつかせる。

「無理です！ お尻でするなんて、わたしにはできないです！」
叫ぶ美月の肛門に、弘志は唇を押しつけて、舌をねじこんだ。

「ひゃっうううん！」

尻をたたかれたときと同じ、甘い音色の悲鳴があふれる。

おののく肛門の上で舌が踊り、暴れ、さらに奥へと潜入しようとする。

「ひやつ！ やつ、やああ！ お尻が、お尻がああ！」

美月の引きつった顔を、雫と寿々香がじつと見つめた。寿々香は微妙な面持ちだが、尻を調教開発されている雫は羨望の眼差しを向けている。

「美月がうらやましいわ。これからはじめてお尻の悦びを知るのだもの」

「そんなの、わたしは知りたくは、あふううつ！」

言葉では拒否しながら、自身の発言を打ち消して、甘いよがり声があふれる。精液を浴びた美貌は、未知の刺激に蕩けかかっていた。

「わたしは雫とは違う、あひいいっ！」

舌よりも硬いものが、肛門に押しつけられた。背後に顔を向けると、弘志がまさに後背位の体勢で、左手で自分の尻をつかんでいる。

「や、やめ、玉串が入ってきます、はおおううう……」

目で見なくとも、はつきりと感じられる。肛門が亀頭に突破され、侵入を許してしまつた。

雫と寿々香が左右から、美月の尻を覗きこむ。

「美月、お尻に入つたわよ」

「おー、入つてる、入つてる」

あわてて美月は叫ぶ。

「見ないで！ そんなところを、はっああああっ！」

肉棒が一気に押し入ってくる。排出専門の器官を、異物で強引にえぐられる。

尻に向かつて、弘志の勝ち鬨どきの聲がぶつけられた。

「美月さんのお尻に入りました！ 美月さんのお尻の処女をもらいましたよっ！」

「あくうっ……んん……くおおお……」

弘志の歓声に、美月は答えられない。顔を左右に振り、ただかすれる喘ぎを、ときれとぎれに洩らすだけ。

かわりに、雫が興味津々の顔つきで甥にたずねた。

「弘志ちゃん、美月のお尻の具合はどうかしら？」

「美月さんははじめてだから、きゅうきゅうしてて、ぴっちり貼りついてきて、す

ごく気持ちいいです。本当にたまらない！」

「ええっ、まるでわたしの使い古しのお尻がゆるゆるで、全然気持ちよくないみたいだわ。弘志ちゃんはそう思っていたのね」

いかにも演技という仕草で両手で顔を覆う雫に、弘志は焦って言いつくろう。

「そ、そういう意味じゃなくて、雫さんのお尻はいつでも最高です！」

「そう言いながら、弘志ちゃんは腰を振っているわ」

雫の指摘通り、弘志の顔は叔母に向くが、腰は前後にピストンして、ペニスを美月の肛門に突き入れている。そのたびに美月の尻がくねり、四つん這いの身体が大きく波打つ。

雫が、美月の顔を覗きこみ、うらやましそうに告げる。

「美月のお尻はすごいそうよ。よかったわね」

「よ、よくないです！ ああ、よくないけど、気持ちよくてたまりません！」

美月は首をひねって、弘志をにらみつける。ついに尻の快楽を認めた巫女の顔は、制御できない自身の欲望であふれていた。

「弘志さんのせいで、お尻で感じる女にされてしまいました。あ、はあああ、こうなったら、お尻で被ってください！」

雫と寿々香はまた首をかしげ合う。

「祓う？」

「祓う？」

弘志にはもちろん、疑問などない。

「もちろんです、美月さん。ぼくがお尻でいっぱい感じさせて、祓います！」

美月のお願いの言葉に力を得て、弘志の勃起がさらに猛々しくなる。勢いに押されて、美月の身体が畳の上をずるずると前へ進んでいく。

「やっ、ふやあ！ お尻、狂っちゃう！ 狂いますうう！ あおおおおううっ！」

膝や手が畳の目にこすれて音を立てるたびに、美月の尻が激しく踊り狂い、喜悅の高みに昇っていく。

「美月さん、これもお尻に欲しいんでしょう！」

再び、弘志の手が、快樂でピンクに染まる尻たぶに振り下ろされた。今度は両手がタイミングをずらして尻肉をたたき、軽快な打撃音を小刻みに連続させる。

「あひいっ！ いいっ！ くううっ！」

美月は叫びを部屋に響かせ、雫と寿々香は痛みを想像して顔をしかめた。

「まあ、痛そう」

「本当に、こんなのがいいの？」

返答のように美月の歡喜の叫びがつづく。

「いいっ！ 気持ちいいですう！ ひいっ！ あくっ！ やふっ、いいっ！ たたいて！ もっと美月のお尻をたたいてくださいっ！ 弘志さんにお尻をたたかれながら、常世へイカせてください！」

「わかつてます。ぼくの手と勃起で、神代に飛んでください！」

遠慮も容赦もなく、女尻を太鼓の演奏さながらに連打する。たちまち尻肉が赤く光り、今にも湯氣を上げそうになった。

尻が奏でるリズムに乗って、肉棒が尻を激しく突き上げ、腸内を豪快にかきまわす。外側と内側からの鮮烈な責めに、美月は限界を高々と突破した。四つん這いの身体を背骨が折れそうなほどにのけぞらせて、天井へ向けて絶頂に吠える。

「イクッ！ ふあああああつ、常世へイキますううううううううううううううっ!!」

美月は喉を震わせながら、畳につつぶした。肛門から、ペニスがつっぱ抜ける。絶頂の余韻の中で、畳に横たわる美月の尻がピクピクと痙攣した。

しかし、姿を現した男根は、まだ射精していない。内に精力を蓄えて、雄々しくそそり勃つたままだ。

「寿々香さん！」

弘志が名を呼ぶと、寿々香は喜々として四つん這いのポーズにもどり、子犬がしっぽを振るようにスポーツショーツに包まれた尻をくねらせる。

「わたしのお尻の処女が欲しいんだよねえ？」

「欲しいです！」

叫ぶなり、スポーツショーツを引きずり下ろした。

「あげるから、しっかり味わって」

寿々香は自分の両手で尻たぶをつかみ、大きく開いた。

自らあらわにして差し出された肛門を見て、弘志の勃起が自身の腹を打った。もともと大炎上していた興奮の炎に、さらに大量の燃料が注入される。口や手で前戯するという考えは、一瞬で焼失した。

「行きますっ！」

雄叫びを放って、いきなり亀頭を肛門に押しつける。一瞬の抵抗があったが、すぐに中に突入できた。

たちまち男根全体に、熱い柔肉が吸いついてきて、うねうねと蠕動する。まるで弘志の肉体を消化して、栄養として吸収しようと、懸命になっているようだ。

「寿々香さんのお尻の中、激しい！ すっごくいい気持ちだ！」

寿々香も子犬が濡れた体毛を乾かすかのように身体を震わせ、はじめから甘い嬌声を出した。

「あんっ、わたしも、いいっ！ 弘志くんのお尻、いいよ！」

「あんなに接合部分をしっかりと観察している雫が、疑惑の目を向け、疑念の声を上げる。」

「あら？ はじめてのわりには、寿々香のお尻の穴は、ずいぶんすんなりと弘志ちゃんを受け入れるのね。本当に後ろは処女なのかしら？」

「寿々香はうっとりとした顔を、雫へ向けて、ペロリと舌を出した。かわいい子ぶっているが、かえって淫らな表情になる。」

「ああ、弘志くんに最初にお尻を舐められてから、がまんできなくて、お尻に指を入れてオナニーしてたの。あううっ、気持ちいいっ！」

「つまり、ゆるゆるってことなのね」

「ゆるゆる言うな、あひいっ！」

「寿々香の下半身が猛烈に突き上げられて、尻が高く浮き上がった。」

「ひあああっ！」

思わぬ強引な一撃に悲鳴を上げる寿々香の耳に、弘志の喜声がねじこまれる。

「それなら、思いっきりやってもいいんだ！」

「それは、あとおうつ！ チンチン、すごひいっ！」

再び寿々香の尻が舞い上げられる。余裕のあつた寿々香の顔が、一転して追われる獲物の表情になった。

追ってくるのは、肉食獣と化した容赦のない若い男の欲望。連続して獐猛な攻撃を喰らって、まともな言葉すら紡げなくなった。

「しゅごっ！ あひっ！ ひりよしくふん、チンチヒン、チンチヒイインン、しいごしぎるうううつ、くおおおおつ！ チンチンチンチンチンチンチンッ！」

寿々香の乱れようを、雫はしみじみと観察している。

「自分の指で肛門を開発して、処女のまま敏感になってたのね。そんなお尻に本物のおちんちんを入れられたら、それはたまらないわよ」

経験者は語る、という雰囲気の雫の言葉も、苛烈に追われつづける寿々香の耳には届かない。

追いたてる弘志も、寿々香の尻を責めること以外、意識に上らない。こちらも人間の言葉を忘れて、獣のように吠えるばかりだ。

寿々香は無意識のうちに両手を伸ばし、右手で雫の左手首をつかんだ。左手も美月の右のふくらほぎに、がっちりりと五本の指を食い入らせる。

雫は微笑み、右手を寿々香の右手に重ねる。

「うふふふ。いつもは経験豊富を自慢する寿々香が、今日はへろへろね。さすがは赤岳祭の夜の前ということかしら」

美月も自分の足を握る手に、両手を置いた。

「今の寿々香はとってもかわいいです」

二人への返事は決まっていた。唇の端から垂れる唾液とともに、淫熱に煌めく言葉が飛び散る。

「イクッ！ イッチャふううう——ううんっ!!」

寿々香は全身を小刻みに震わせる。全身の細胞が、エクスタシーの熱で沸きたって
いる。

普段以上の力で、雫の手と美月の足を引き寄せ、子犬が母親に甘えるように、無意識に二人の手足をペロペロと舐めた。

若女将と巫女は目を見張り、寿々香の忘我の表情を見つめる。

「寿々香ったら、本気で絶頂を迎えると、こんなに甘えたことをするのね」

「本当は、わたしたちと同じ、男に頼るタイプなのかも」

二人の言葉は、寿々香の耳には入らない。身体がかたむき、人形のように畳に転がる。

「くうっ！」

弘志は奥歯を噛みしめる。寿々香の肛門から抜けた衝撃で入りかけた射精のスイッチを、ギリギリで止めて、最後の名を召喚した。

「雫さん！ もう限界です。早く、雫さんのお尻に入りたい！」

雫は正座したまま、畳の上を滑るようにして甥の前に移動すると、くるりと身をひるがえし、四つん這いになる。Tバックが深く食いこんだ尻を掲げた。

「待ってください！ わたしも、もう一度、お尻をお願いします」

雫の左に、美月が手と膝をつき、まだ赤い尻を弘志へ捧げた。

「わたしも、もっと、尻に欲しい！」

寝そべっていた寿々香が身体を支えて、雫の右側に這い、肛門を開いたままの尻を差し出す。

再び、弘志の目の前にそろった三つの年上の女尻。それも、すべて一度は自分のペニスで貫いた尻が並んでいるのを見て、弘志は雫に入れる前に暴発しそうになる。

「うおおおうっ！」

獣の遠吠えを放って、白いTバックをむしり取る。亀頭を雫の尻の奥まで、猛然と突撃させた。

「ああ、弘志ちゃん、すてき」

雫は尻を大きくうねらせ、しっかりと甥の肉棒を堪能する。

若女将の尻粘膜を味わいながら、弘志は左手の人差し指を、美月の肛門に根もとまで突き入れた。

「はゆっ！ いいですっ！」

右手の人差し指は、寿々香の開いた尻の穴にねじりこむ。

「あおう！ すぐに死んじゃいそう！」

弘志は夢中で腰を前後させ、両手の指をくねらせる。二つの尻が前後左右に踊り、互いにぶつかり合っては、汗に濡れた音を立てる。

雫の嬌声、美月のよがり声、寿々香の歓呼が淫靡なコーラスとなり、部屋を埋めつくす。

尻の乱舞。ブレンドされる女体の匂い。よがり狂う合唱。濡肉の摩擦音の伴奏。

そしてなによりペニスと両手の人差し指をしゃぶる、三つの肛門と腸粘膜の肉悦。

感覚のすべてが、弘志を最高の射精へと導いた。

挿入してから、わずかな時間しかたっていない、まだ雫を満足させていないかもしれない。

しかし、もう弘志は本当に限界だ。

「雫さん、もう、出しますっ！」

雫は甘くやさしく、淫らに彩られた声音で答えた。

「いいわ。いっぱい出して。ああああ、弘志ちゃん、いっしょに昇りつめましょう」

叔母の声の美しい響きが、鼓膜と精巣をくすぐる。それがスイッチとなった。

「出るううううっ!!」

雫の尻の奥で亀頭が噴火して、焼けつく快感のほとばしりとともに、二度目の精液が熟女の腸にぶちまけられる。赤岳町に来て以来、女体の中に何回射精したのかはわからないが、確実に、今が大量の精液が出ているとわかった。

腸壁に締めつけられる左右の人差し指からも、同じ量の精液が噴出するイメージがあふれて、絶頂の快感が何倍にも増幅される。

甥の大量射精を尻で受け止めて、雫は腹の中が男のエッセンスで充満する歓喜に浸る。女として、これ以上のエクスタシーはない。



(どうなるんだろう)

弘志の脳裏にひとりでに映像が浮かんだ。自分ではない若い男が、勃起した肉棒で雫たちの肛門を突いている。

嫉妬は感じなかった。そうなってもしかたない、としか思えない。

列車は赤岳町を包囲する山を貫くトンネルから出て、人々が住む都市へ向かって走った。

「わたしたちは、ここではないところへ帰り、ここではないところからまたやってくるわ。それが、まれびとよ」

紅宵荘の若女将はそう言って、ごうごうと燃え盛る炎の中に消えた。

— 紅の祭 最終章より —

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>



キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!

ヴァルキリー

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry

<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille

<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元
ドリーム**

<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!